

その生涯を丁寧な追跡

私市 保彦著

名編集者エッツェルと

巨匠たち

フランス文学史

十九世紀フランスの文学出版の歴史には、いまもよく知られた輝かしい名前がいくつもある。アシエット、ガルニエ、カルマン・レヴイ、ファスゲル等々。エツェルもそのひとり、社業は二十世紀に生き残ることはできなかったけれど、名前は私などでもどこかで聞き知っていた。エツェル版『ヴィクトル・ユゴー全集』がある家の書架にずらり勢揃いしているのを見た記憶もある。

文学史家、文化史家としての意欲は、よく理解することができた。出版人として版業もむろん例外ではない。この本でも、エツェ

の時代、起業の才覚にめぐまれた人間が新しい事業を開発する可能性は、まさに豊かに開かれていた。出版業もむろん例外ではない。この本でも、エツェ

は二十世紀に生き残ることはできなかったけれど、名前は私などでもどこかで聞き知っていた。エツェル版『ヴィクトル・ユゴー全集』がある家の書架にずらり勢揃いしているのを見た記憶もある。

共和派の政治家、活動家として、生涯にわたってどんな活動をしたか、じつに丁寧に追跡されている。そういう筆の進めかたの総合的な果実として、十九世紀フランスの文化に確実な一翼を作りあげた人物の像が浮かぶ

の傾きが見られる場合も少なくない。この著者はそんな危うさとはまったく縁がない。あれから何年になるか、以前、『幻想物語の文法』を読ませてもらったときに感じたことだが、私市氏の探索の出版には作者・作品にたいする揺るぎない愛着、そして冷静な評価がある。そこでは、逸話、挿話、内幕話の興味も欠かすず境界にとりいれながら、しかし探索の出版でもあり中心でもあ

時代の大波を活用した出版文化人

19世紀フランスの文化に確実な一翼を作りあげた人物の像が浮かぶ

菅野 昭 正

この本の著者私市氏によれば、エツェルは、すくなくとも日本では、その業績に比べて知名度が低すぎるという。労作と呼ぶにふさわしいこの評伝を一読して、義憤というのほらならないにしても、もっと正しい評価を、という著者の

が、読後に残される。出版の仕事を手うに上手に活用したか、たとえはバルザックとの関係をめぐる興味ふかい逸話をまじえて、こまごまと展望されてゆく。この出版文化人は時代の方に後押しされながら、しかし受動的に流されるのではなく、個人の創意工夫によって、時代の隅に新しい波を捲きおこ

すのにめぐりに成功した。十四歳年下のジュール・ヴェルヌの新種の才能を見て、海洋冒険小説、さらには二十世紀のSFのはじりのような未来小説の世界へ、大胆に乗りだしてゆく手引きをしたのは、著者がどりわけ熱をこめて書いているとおり、たしかに後世に伝えられてしかるべき功績であろう。



名編集者エッツェルと巨匠たち

46判・544頁・5775円
新曜社
978-4-7885-1038-8

★きさいち・やすひこ氏は武蔵大学名誉教授・フランス文学・比較文学専攻。東大大学院修士課程修了。著書に「『ネモ船長と青いげ』」「幻想物語の文法」「フランスの子どもの本」「琥珀の町―幻想小説集」など。

